

No. 141号

OB・Gニュース

二十九年一月五日

発行責任者

社民党がんばればOB・G福島の会

eメール hurya.nichitatsu@orange.plala.or.jp

明けまして

おめでとうございます

2019年1月

りなく戦前型の天皇を求めようとする動きのあることは事実である。

そこで幾つかの例を見てみる。

2013年4月28日、「主権回復・国際社会復帰を記念する式典」が政府主催で実施、その場に天皇と皇后を出席させた。式典は極めて復古的、右翼色の強いものであったと報じられている。閉式のあと天皇・皇后が退席しようとしたとき、突然「天皇陛下万歳！」が三唱され、安倍首相らも壇上でこれに続いた。天皇と皇后の表情は固まったままだった。

さらに東京オリンピック招致の際に高円宮妃がIOC総会でスピーチをされた。そこに至るまで首相官邸と宮内庁が激烈な駆け引きを演じられたという。当時の風岡典之宮内庁長官は、宮内記者会で「招致活動の一環と見られかねない懸念もあり、苦渋の決断だった」「両陛下もご案じではないか」と拝察すると述べている。また天皇の国事行為としての衆議院の解散の規定を恣意的に使い、説明のつかない解散に正当性を帯びさせるなどは典型的な例であろう。秋篠宮の発言を契機に「主権者」としての国民の意識が問われると思うが。どうだろう。(文責・降矢 通敦)

秋篠宮の発言を契機に

国のあり方をしっかりと考えよう

非常に重たいテーマであるが、戦争の記憶がまだ存在しているこの時期に考えなければならぬ重要な課題である。

まず大東亜戦争開戦の詔勅(米英両国二対スル宣戦ノ詔書)を見る。そこには「万世一系の皇位を継ぐ大日本帝国天皇は、忠実で勇敢な汝ら臣民にはつきりと示す。全力を奮つて交戦に従事し」と書かれてある。改造内閣で指名された文部大臣が「教育勅語」を持ちだした。時代錯誤と笑っては行られない。その勅語も「汝臣民」と言う言葉から始まる。

「臣民」は「天皇の子」(赤子)である。そして「天皇の子」として戦争に赴くことを強制された。いわゆる逃れることのできない「召集令状」(赤紙)である。

私たちはその戦争の経験から、統帥権を持ち「神格者」としての天皇(制)を廃止した憲法を手にした。しかし73年を経過した今日、日本国内の保守派が、再び統帥権を持つ「元首」とする天皇制の復活を狙っている。それだけではない。全国の被災地訪問などを継続されていることに對し「天皇は天皇家(制)が

続くことを祈ることに意味がある。それ以上

を天皇の役割と考えるのはいかがか」と神格化を狙う発言も続く。そのような情勢の中でこの度の秋篠宮の発言をどう考えるかである。その発言を要約してみる。

秋篠宮が11月30日の記者会見の中で、天皇の代替わりに伴う皇室行事「大嘗祭」については「宗教色」が強いものであり国費で賄うことが適当かどうかと述べた。また「身の丈に合った儀式」とまで述べ、膨大な費用について疑問を寄せられた。今回の発言に對し「当事者の立場にある秋篠宮が『皇室の行事』のあり方について見解を述べることで排除されていないと考える」とするのが大方の識者の意見と受け止める。また「多くの庶民が心中、ひそかに抱いていた思いではないだろうか」という意見もある。しかし、その立場を「政治的」と疑問視する声のあるのも事実である。

限りなく戦前型の天皇(制)への動きを見る

そこで考えてみたい。

では「政治への関与」とするならば、政府が、あるいは一部保守派が「天皇(皇室)を政治的に利用しようとする動き」がないとは言えないかと言ふことである。また「象徴」から限

【資料のお勧め】

水島朝穂教授(早大・憲法学者)のホームページの検索をお勧めいたします。

・タイトル「水島朝穂のホームページ・直言」

「今日は何の日」!!

1966・12月8日未明のどきどき

朝のラジオ番組「今日は何の日」。「日本時間1941年（昭和16年）12月8日『臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部、12月8日午前6時発表。帝国陸海軍は本8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。』」と。そしてもう一つの事件があった。1980年、平和主義運動により世界的な名声を得ていた英国のミュージシャン、ジョン・レノンの暗殺があった。そして77年を経た2018年12月8日の未明に日本の国会は「改正入管法」の強行可決を行った。当日マスコミは入管法の成立を報じていたが、真珠湾攻撃も、またジョン・レオンの報道も耳にすることはできなかった。そして3日前の12月5日の毎日新聞に「熱血！与田政談」のコラムが掲載をされていた。それには「どっちもどっちのワナ」がタイトルになっていた。与田正男さんは書いています。「国会で与野党が対立すると必ず出てくるのが、与党も野党もどっちもどっちだ」という話と、「与党も強引だが、野党も抵抗するだけでなく対案を示せ」ということが強調される」と。では今般の「入管法」を考えてみよう。ニュース12月号にも掲載しているが、提案者である政府の説明も答弁もあいまい、かつでたらめである。それだけではない。法務

省による集計ミスの発覚に対し、野党はその説明を求めたのに対し、政府、与党は11月19日以降、2892人分の聴取票の開示を確約した。しかしコピーや撮影、持ち出しは禁止。同時に閲覧できるのは野党会派ごとに最大5人を条件に野党の各派は手分けして書き写したと言う。「1時間に1人20枚程度の手書きが精々。国民に選ばれた代表の国会議員が黙々と手書きを続けたと言う。議会の権威は、議会の民主主義はどこに行つたのだろうか。

そのような議会の力関係の中で「対案を出して討論せよ」と言うことが通用するというのだろうか。衆院法務委員会の理事を務めた自民党の平沢勝栄氏は「この問題は議論したらきりがないんです。いくらでも問題点が出てくる」と語っている。与田さんは「（平沢さんは）正直な人だ。与党はなぜ成立を急ぐのか。議論をすればするほど問題点や主張との矛盾点が出るのが分かつているから深い議論をしたくないのだ」と。

そしてこれにもう一つの尾ひれがつく。安倍晋三首相は東京都内のある会合で「あす法務委員会に出てややこしい質問を受ける」と発言しことが報じられた。身内の会合であったため「本音」が出た発言だったのであろう。

さて、韓国人の元徴用工訴訟で、韓国最高裁が出した判決について安倍首相は衆院予算委員会で「徴用工」と呼ぶのをやめ「労働者」と言い換える発言をしている。原告たちは自

ら応募したのだから「労働者」である。「労働者」なら労働条件に納得して応募した自由契約の意味合いが強いと主張したのであろう。

安倍内閣の「言い換え」発言を切る

◆「入管法」による外国人の入国は移民である。しかし移民とは言わずに「外国人材活用」と呼んでいる。◆自衛隊の派遣先の戦闘を「武力衝突」。◆沖繩でのへり墜落を「不時着」。◆共謀罪を「テロ等準備罪」。◆公約違反に対しては「新しい判断」。◆カジノ施設を「統合型リゾート」。◆憲法解釈の変更を「平和安全法則」。◆そして極め付きは武器の輸出を「防衛装備の移転」。◆情報隠しを「特定秘密保護」で逃げ切る。◆さらに事実上の「空母」を「多用途運用護衛艦」とし「攻撃型空母」は保有できないとされていることから批判をかわすのが狙いである。

安倍政権の不誠実な答弁の手法を批判する『「飯論法」の上西教授は「過労死が懸念される法改正を『働き方改革』や『高度プロフェッショナル』と言い換えたのと同様に、触れられたくない中身には触れず論点をずらしたり、はぐらかしたりして野党の追及をかわしてきました」と指摘する。例えば、徴用工を労働者と言い換えることについても「厚顔無恥話法による印象操作の一種ではないでしょうか」と批判する。



あきらめないで。

がんばりましょう

河辺 信雄

(OB・Gの会副会長)

第197臨時国会は12月10日、48日間の会期を延長することなく閉会した。振り返ってみると、今国会は安倍政権のあまりにも強引な運営に各方面から不満、危惧の念が寄せられた。マスコミからも重要法案であるにもかかわらず、①あまりにも少なすぎる審議時間、②数に奢った緊張感に欠ける政府提案と答弁③結論ありきの無責任な強行採決に批判の報道(投書も含め)が数多く流された。

国民からも「こんな国会で良いのか!」という怒りの声とともに「空しさを感じた人も多かった。「TVコメント」ようである。

どうしても穿った見方をしてしまう私は、今国会を通して「もしかしたら安倍総理はワザとこのような国会運営をしているのではな

いか?」と思うようになった。
近々憲法改「正」を俎上に上げる前に反対勢力の機先を制するための安倍晋三、一流の戦術とみるのは下衆の勘繰りだろうか。

臨時国会が閉じた3日後の12月14日、政府は辺野古新基地への土砂投入強行に踏み切った。沖縄県民の意志や、翁長、玉城知事の間での努力、要請が既定方針のもとにいと

簡単に無視されてしまったのである。
日頃、耳ざわり良い言葉を連発している安

倍総理がいざとなると「これでもか!」「これでもか!」とばかりに、民意の押さえ込みを強行してくるネライをよく分析してみると、下衆の勘繰りも真実味を帯びてくる。

玉城知事は15日の集会で「県として取り得る手段はしつかり講じていく。対話はこれからも継続する」「県民を諦めさせようと躍起になっ

ているが絶対に諦めない」と力強く語ったという。
さすが!と沖縄の皆さんに敬意を表してエールを送るとともに、私達も共に学び闘う決意を表明したいと思う。

これからほどなく安倍総理の目指す憲法改「正」の論議や日程などが具体化してくると思う。日本の平和と民主主義、自らの生活を守るため最後まで諦めないで守り抜く決意で取り組もうではありませんか。

ガンバレ社民党
ガンバロー沖縄の皆さん
ガンバローOB・Gの会の皆さん

【ニュースを読んで】



OB・Gニュースは12月号を持って140号となりました。そして数人の皆さんからの感想が返信の形で送信されています。その返信の一部を要約し、匿名による紹介のコーナーを設けました。今後とも皆さんの感想をお待ちしています。

(編集担当)

◆若者と高齢者のどちらかを重視するとか、どちらに損得があるのかといった議論ではなく、まさに「分断」を迫る政府に対して、「連帯」の力で押し返すことが必要だと感じて

ています。いろいろな集会に出てみると参加しているのは高齢者ばかりということが続いています。「若者はSNSに頼りきりで違う意見に耳を傾けない」という批判が私たちにも跳ね返ってくるような気がしています。まさに「ニュース」のように誰に対して心を開く姿勢が必要だと感じます。

◆老いの問題は夫婦間でもお互い認識し合っています。「そのことは先ほど言ったでしよ」と言葉を返します。また「やってしまった」と反省しながら「おれもボケたし二人で一人まえだね」と取り繕います。

◆社民党ががんばれOB・Gの会発足の記事を見ました。また社民党の流れも思い出す当時を振り返ることができました。早く安倍政権を終わらせないとんでもないことになりま

すね。高齢者も安心して余生を送ることができなくなると酷くなる一方です。◆私も67歳、我が家は子供もいなく高齢者問題も切実に考えさせられました。少子高齢化社会について社民党としての政策が問われて

【寄稿】

今も残る戦争の傷痕を辿る旅

星 キク子さん

(郡山・あけぼの会会員)

二〇一八年一〇月、一泊二日で長野県へのバス旅行に参加しました。私が所属する【福島県退職女性教職員あけぼの会】が企画する研修旅行です。これまでに、秋田の花岡鉦山、栃木・群馬の足尾銅山、宮城・福島の津波・原発事故の被災地を巡りました。

四年目の今年、長野県にある『満蒙開拓平和記念館』と『松代大本営跡』を訪ねました。初めの計画では『無言館』へも行く予定でしたが、何しろ長野県は遠く、そして広い県なので移動に時間がかかるためカットされてしまいました。でも私はかつて訪れたことがあり、戦没画学生たちの無念の想いに胸を打たれた思い出があります。

高速道を幾つか乗り継いで、一日目に訪れたのは、長野県の南部、阿智村という所にある『満蒙開拓平和記念館』です。ここには戦時、日本の国策により三十万人に近い日本人が移民として送り込まれ酷寒の満州で開拓に従事。しかし、敗戦により命からがらの引き揚げとなった残酷な歴史の真実を語る多くの資料が展示されていました。写真に残る人々の苦労に滲んだ顔、幼い子どもたちもいれての何か月にも及ぶ逃避行、餓死する人、

病で命を落とす人、一滴の水も飲めずに死んでいく子ども……。墓も作れず、遺体は野に置き去りにされて。約三分の一の人がやつとの思いで日本に辿り着いたのです。その人々の悲惨な体験を語る文書も沢山展示されていました。涙なくしては読めない内容でした。本としても売られていたのでカンパのつもりで購入してきました。

実は、この記念館は民間の手で建てられ運営されているのです。長野県は全国で最も多く約三万三千人もの移民を送り出していました。戦争のもたらすこの悲劇を後世に伝え教訓にして欲しいと願っているのです。

ぜひとも多くの人々にここを訪れ平和の尊さを学んで欲しいと思えました。(続く)



開拓団の民家



開拓記念館の全景



原野を切り開く開拓

コーヒータイム

忘れてはならない記憶がある

記憶は薄らぎ、そして忘れ去ることがあります。それも長い人生を生き続ける知恵かも知れません。しかし決して忘れてはならない記憶があります。その一つに73年前に経験をした戦後の記憶です。そして被災8年目を迎えながらも、今もって後遺症を残している東日本のトリプル大災害も忘れることはできません。よく言われている言葉に「記憶が遠ざかるとき、災いはやってくる」と。忘れてはならない記憶はしっかりと残したい。そのような意識を大事にしたいと思います

究極の「言い換えに」怒りを!!

海上自衛隊の全通甲板ヘリコプター搭載護衛艦「いずも」が空母に改修される。憲法の制約上、保有が認められないとしてきた「攻撃型空母」にあたるのではないかとという指摘に対し小野寺五典前防衛大臣は「専守防衛の立場は変わらず、検討していない」と回答していた。しかし、中期防衛力整備計画の中で「いずも」をステルス戦闘機F-35B(1機150億円以上)10機の発着が可能なものに改修するという。そこで出てきた表現が「多用途運用護衛艦」という言い換えである。このような言い換えが近代の民主国家で通用するのだろうか。安倍一強のおごりに強い怒りを持つ。

